

[翻 訳]

ザストロツィーロマンス (1)

パーシー・ビッシュ・シェリー 著
治村輝夫 訳

第一章

この世で自分が大切に思うあらゆるものの集いから引き裂かれ、正体不明の敵たちの犠牲となり、幸福から追放された者、それが惨めなヴェレツィであった。

あたりはすっかり静まりかえり、漆黒の闇が事物の表面を包み込んでいた。その時、かき乱されることもなくヴェレツィが眠っている宿の戸口に、激しい復讐の念に駆り立てられてザストロツィが立った。

大声で彼は主人を呼んだ。ザストロツィという名前だけでも恐れる宿の主人は、震えながら呼び出しに応じた。

「おまえはヴェレツィというイタリア人を知っているな。ここに宿泊しているだろう」「はい、しておられます」と主人が答えた。

「そいつはわしがひたすら破滅させようとしてきたやつだ」ザストロツィは叫んだ。「ウーゴとベルナルドをやつの部屋まで案内しろ。間違いが起きないようにわしもおまえと一緒に行こう」

用心しながら彼らは上っていった。報復の目的を首尾よく実行に移し、彼らは眠っているヴェレツィを馬車が待っている場所まで運んだ。復讐心に燃えたザストロツィの餌食を目的地まで移送するのだ。

ウーゴとベルナルドはまだ眠り続けている

ヴェレツィを持ち上げて、馬車の中に入れた。数時間彼らは先へと進んでいった。ヴェレツィはまだ深い眠りに包まれていた。それまでのどんな動きも、彼を目覚めさせなかった。

ザストロツィとウーゴは、先頭の左馬を御しているベルナルドと同じように、覆面をしていた。

彼らが人里離れた、ヒースの荒野にある小さな宿屋で馬車を止めた時、まだ暗かった。そして馬を取り替える間だけ待つと、また先へと進んだ。やがて日の光が見えてきた。それでもヴェレツィの眠りは破られないままであった。

彼の尋常でない眠りの原因をウーゴはザストロツィに恐る恐る尋ねた。ザストロツィはそれについて熟知していたが、不気嫌な顔をして答えた。「わしは知らない」

一日中彼らは急ぎの旅を続けた。その間ずっと、自然はこの上なく陰鬱な幕を下ろしているようだった。彼らは時折宿屋で停止して、馬を替え、口に入れるものを手に入れた。

夜がやって来た。彼らは踏みならされた道から外れ、広大な森に入るとでこぼこした藪の中をゆっくりと進んだ。

ついに彼らは馬車を走らせるのをやめた。馬車から犠牲者を持ち上げると、洞窟へ運んでいった。それは、近くの小さな谷の方にぼっかりと口を開けていた。

この不当な迫害の不運な犠牲者は、忘却のおかげで自分の置かれている恐ろしい状況を知らないでいたが、それも長くはなかった。彼は目を覚ました。すると、余りの恐怖に圧倒され、悪漢たちの腕から猛烈な勢いで跳ね起きた。

彼らは今洞窟の中に入っていた。ヴェレッツィは岩の突き出している部分にもたれて体を支えた。

「抵抗しても無駄だ」ザストロツィが叫んだ。「おとなしく黙ってわしらについて来ることだけが、お前の受ける罰をわずかなりとも軽減できるのだ」

ヴェレッツィは異常な眠りで弱り、最近の病気で衰弱している体が許す限り、急ぎ足で行った。それでも、自分が目を覚ましていることが信じられず、また眼前の光景が現実であるとは完全には確信できず、恐ろしい夢がよくかき立てることのあるあの言いようない恐怖心を抱いて、あらゆるものを見た。

でこぼこした坂をしばらくくねくねと下って行くと、彼らは鉄の扉にたどり着いた。それは一見したところ、岩自体の一部のように見えた。この時まで、あらゆるものがまっ暗闇の中でおぼろになっていた。その後、ベルナルドの持ってきた灯火の明りで、ヴェレッツィは自分を迫害する者の覆面をした顔を初めて見た。

巨大な扉が突然開いた。

外から差し込む灯火が、中にみなぎっている暗闇をさらにいっそう恐ろしいものにしていった。そしてヴェレッツィはこの洞窟の内部を、二度と抜け出すことができない場所——自分の墓——として見た。再び、彼は自分を虐待する者たちと取っ組み合ったが、彼の衰弱した体は屈強のウーゴともみ合い続ける力がなく、押さえつけられると、気を失ってウーゴの腕の中に崩れるように倒れ込んだ。

勝ち誇った迫害者ははじめじめした小部屋に彼を運んで行き、鎖で壁につないだ。腰には鉄の鎖がぐるりと巻き付けられ、小さな藁くずほども岩から離れられなかった。手足は巨大なかすがいで石英の地面に固定された。ただ、毎日与えられるごくわずかなパンと水を取れるように、片手だけは使えるようにされた。

彼に許されたのは思いを巡らすことだけだったが、それは現在を過去と比べることになり、この上ない苦痛であった。

朝と夕方にウーゴが粗末なパンと水差しを持って小部屋に入ってきた。ザストロツィは、時たまを除いて、めったに一緒ではなかった。

彼は慈悲、憐れみを、また死をも願ったが、無駄だった。

ヴェレッツィは苦痛に満ちた監禁状態でつらい思いをしながら、相も変わらぬ単調さで繰り返される恐怖と絶望の、数えきれないほどの昼と夜を過ごした。彼のむき出しの、動かない手足をぬめぬめしたトカゲが横切っても、今では身震いすることはなかった。自分の長い、もつれた髪の毛のなかで大きなミミズたちがからみあっても、ぞっとすることはほとんど無くなっていた。

昼と夜はどちらがどちらなのか区別がつかなかった。そこで過ごした期間は実際には数週間に過ぎなかったが、不安に駆られた想像の中では何年にも引き延ばされた。時には自分の苦痛がこの世のものとおおよそ思えなかった。ウーゴ（その顔は彼には悪魔に見えた）は、彼のよみがえる希望を打ち砕く復讐の化身だった。ミュンヘン近くの宿屋からの不可解な移送も彼の思考を混乱させた。彼はそのことだけをひたすら考えたが、何ら結論に達することはできなかった。

ある夕方、長時間の観察でぐったりして、監禁されて以来およそ初めて彼は眠り込んだ。その時洞窟中に響きわたるガラガラという大きな音に目が覚めた。注意深く耳を澄ました。希望は胸のうちでほとんど死にかけていたのだが、希望を持ちさえした。もう一度耳を澄ました。もう一度同じ音がした。しかし、それは上空の自然を揺さぶる激しい雷雨に過ぎなかった。

希望を抱く愚かしさを確信して、彼は自分の造り主——この地上の深部からの嘆願を聞いてくださる方——に祈りを捧げた。

彼の思いは現世の喜びを超えて高揚した。苦しみはそれに比べると無に等しかった。

彼の思いがこのように巡っている間、さらに激しいガラガラという音が洞窟を揺さぶった。明るく輝く炎が天井から床まで飛び交った。ほぼ同時に、屋根が崩れ落ちた。

大きな岩の断片が洞窟の端から端まで転がっていた。一方の端は固い壁の中にのめり込み、もう一方の端はどっしりとした鉄の扉をほとんどこじ開けてしまっていた。

ヴェレツィがつながれていた岩はびくともせず、不動のままだった。激しい嵐は過ぎ去っていたが、雹が勢いよく降っていて、その一粒一粒がむき出しの手足を傷つけた。稲妻は今では遠く離れていたが、閃くたびに目が眩んだ。ごくわずかな光にも目は慣れていなかったからだ。

ついに嵐は止んだ。轟渡る雷は聞き取れないつぶやきとなって次第に消えていき、稲妻の光はほのかで、ほとんど見えないほどだった。日の光が現れた。誰もまだ洞窟にやって来なかった。ヴェレツィは、彼らが自分を空腹で飢え死にさせようとしているか、何か災難が起きて彼ら自身が被害を受けたかのどちらかだと推論した。

水差しは落ちてきた岩のかけらで割れてしまっただけで、パンのかけらが自分に与えられたわずかな食糧の残りだった。

燃えるような熱が彼の血管中を暴れた。そして、絶望的な病で精神が錯乱して、今では死が急ぎ足で近づいてくるのを遅らせる唯一のものであるパンのかけらを彼は体から離れた所に投げた。

ああ！ ヴェレツィの男らしく魅力的な顔立ちに、病と苦しみが合わさって何という破壊的な影響を及ぼしたのだろう。骨は皮膚から突き出んばかりだった。目は落ち込み、窪んでいた。髪の毛は湿気でもつれ、紐のようになって色あせた頬に垂れ下がっていた。朝が過ぎ去り、昼間も同じように過ぎ去った。どの瞬間にも死が——飢餓による長引く死が——目の前にあった。それが近づいて来るのを彼は感じた。夜がやってきたが、何も変化をもたらさなかった。彼は鉄の扉を打つ音で目を覚ました。ウーゴがいつも新しい食糧を持って来る時間だった。騒音が小さくなり、最後にはすっかり治まった。それとともに、ヴェレツィの胸の中で生のあらゆる希望が死に絶えた。冷たい震えが手足全体に広がった。目は心に、荒廃した洞窟のイメージをおぼろに見せるだけだった。彼は腰に巻かれている鎖が許す範囲で、石英の敷石の上にへたり込んだ。そして、その後熱病の危機が訪れたが、彼の若さと抵抗力が打ち勝った。

第二章

その間に、ヴェレツィを死なせてはならないという命令をザストロツィーから受けていたウーゴは、いつもの時間に食糧を持ってやって来た。しかし、昨日の嵐で岩が稲妻に撃たれて

いるのを見て、ヴェレッツィは瓦礫の中で命を失ったに違いないと推測した。それで、この知らせをもってザストロツィの所に行った。どういうわけかヴェレッツィの死を望まないザストロツィは、彼を探しにウーゴとベルナルドを差し向けた。

長い間探した後、彼らは自分たちの不運な犠牲者を発見した。彼は自分たちが置いていった所に鎖で岩に縛りつけられていたが、食べ物欠乏とひどい熱で消耗きった状態だった。

彼らは彼の鎖をほどくと、体を持ち上げて馬車に乗せた。四時間急いで走らせて、老女が一人で住んでいる小屋に意識を失ったヴェレッツィを連れて行った。小屋は他の集落から遠く離れた、わびしく荒涼とした広大なヒースの野に立っていた。

ザストロツィは彼らの到着をいらいらして待ち侘びていた。それで、彼らを出迎えにいそいと駆け寄ると、悪魔のような笑みを浮かべて、自分の獲物のひどく苦しむ顔を入念に見た。彼は意識を失って、ウーゴの肩に長々と体を預けていた。

「やつの命が失われてはならない」ザストロツィが叫んだ。「わしにはそれが必要なのだ。だから、ベッドを用意するようピアンカに言え」

ウーゴは命令に従った。そして、ベルナルドがやつれたヴェレッツィを担いで、後からついて行った。医者が呼びにやられた。医者は、彼を冒した熱病の危機は過ぎ去ったので適切に看病すれば元の状態に戻るだろうが、病気が脳を冒しているので回復には心の平静が絶対に必要な、ときっぱりと言った。

ヴェレッツィの幸福ではなく命が必要であったザストロツィは、自分の報復の気持が強過ぎて度を越してしまったことを知った。彼は、

多少欺くことが必要だと分かった。それで、老女に、ヴェレッツィが回復した時にはこう告げるよう指示した。彼がこの状況に置かれているのは、彼が冒された脳膜炎から回復するにはこの土地の空気が必要である、と医者が主張したからだ、と。

ヴェレッツィが回復するまで長い時間がかかった。長い間、彼は無気力、無感覚な状態でぐったりしていた。その間、魂はもっと幸せな領域へ羽ばたいて行ってしまったように思えた。

けれども、ついに彼は回復した。そして意識を取り戻して最初にしたのは、自分がどこにいるのかを尋ねることだった。

老女はザストロツィに指示された通りの話をした。

「では、誰があなのわびしく、暗い洞窟の中に私を鎖でつなぐように命じたのか？」ヴェレッツィが尋ねた。「そこで私は長い年月の間、これ以上耐えられないほどの苦痛を味わった」

「お可哀そうに！」老女は言った。「男爵様、いったい何と妙なことを言われるのでしょうか！ あなたがまた正気を失うのではないかと心配になってきました。正気に戻ったことを今こそ神様に感謝しなければいけませんのに。洞窟の中で鎖につながれていたとはどういうことですか？ はっきり言いますが、そのような考えに驚いています。どうか気を静めてください」

ヴェレッツィは老女の言葉にとても困惑した。ユリアが自分を粗末な小屋に送り込んで置き去りにする、というのはあり得ないことだった。

老女には申し分ない縁故があるようだったし、いかにも邪気のない話しぶりだったので、その言葉を信じないわけにはいかなかった。

しかし、自分自身の五感の証言と自分の監禁

の確固たる証拠——今に至るまで残っている深い鎖の痕——を疑うことは不可能だった。

もしそれらの痕がいまだに残っているのでなかったら、自分がここに至った恐ろしい出来事は不安に駆られた想像が創り出した夢に過ぎなかった、と彼は考えただろう。

しかしながら、言い争わない方がよいだろう、と彼は思った。許されている短時間の散歩にはウーゴとベルナルドが付き添うので逃げることは不可能だったし、それを試みれば自分の立場がさらに不愉快なものになるだけだろうから。

しばしば彼はユリアに手紙を書きたいという願いを表明した。しかし老女は、手紙を書くことも受け取ることも許してはいけぬ——彼の心を騒がせないという口実で——という指図を受けている、と言った。また、絶望の結果に起こることを避けるために、彼にはナイフの使用が禁止されていた。

病気から回復し、精神が以前にはいつも保持していたあのしっかりとした調子を取り戻すと、ヴェレツィは自分を小屋に引き止めておくのは敵の策略に他ならないことを悟り、今や思いはただ逃亡を果たす手段にだけ向けられた。

ある夕方遅くのことだった。天気は異常な美しさに誘われ、ヴェレツィはいつもの範囲を越えてぶらぶらと歩いていった。ウーゴとベルナルドが付き添って、彼の一举一動を注意深く見守っていた。考えに耽りながら、彼はさらに先へと歩いていった。やがて木の茂った高台に來た。その美しさに、古い檜の木の側面を彫って作られた席で少し休息する気になった。不幸で従属的な自分の境遇を忘れ、もう戻る時だとウーゴが告げるまで彼はしばらくそこに座っていた。

彼らがいらない間に、ザストロツィが小屋に到着していた。彼はいらいらしてヴェレツィのことを尋ねた。

「毎日夕方に散歩するのが男爵の習慣です」とピアンカが言った。「まもなく戻って来られるでしょう」

ヴェレツィがとうとう帰って來た。

入った時にはザストロツィが分からず、洞窟で見た男たちの一人と似た容貌をしているのにひどく動揺し、彼は後ずさりした。

苦痛に満ちたあの恐ろしい住居で自分が経験した苦難のすべてが想像ではなかったこと、この瞬間に自分の最も憎い敵の支配下にあることを、今や彼は確信した。

ザストロツィの目は誤解の余地もないくらい明白な表情を浮かべて、彼を見据えていた。そして心の生来の悪意を隠そうとする様子で、ヴェレツィの健康が夕方の空気で損なわれなかったのならいいのだが、と言った。

自分のあらゆる災難の元凶であることはもはや疑いの余地のない人物からこのような偽善の言葉聞いて、彼は非常に腹が立った。それで、何の目的で自分をここへ運んできたのか、と尋ねずにはいられなかったし、すぐに自分を解放するよう彼に言った。

ザストロツィの頬は激しい怒りで真っ青になり、唇が震えた。復讐に燃えた眼差しで射るように見ながら、こう言った。

「自分の部屋に下がれ、愚かな若造め。自分よりずっと上の者におまえが示した無礼を思い返し、後悔するのには、そこがふさわしい場所だ」

「私は何も恐れない」ヴェレツィが言葉をささぎった。「あなたのむなしい脅しや復讐の無意味な威嚇を受けても。正義は間違いなく私の側にあるし、結局は私が勝つに決まっている」

あの恐るべき、断固としたザストロツィが震えること以上に、美德の卓越性を示すすぐれた証はあるだろうか。というのは、確かに彼は震えたからだ。そして、その瞬間の感情に打ち負かされて、乱れた足どりで囲まれた部屋の中を行ったり来たりした。一瞬、彼は心の中でひるんだ。自分の過去の人生を思うと、目覚めた良心が恐怖のイメージを映し出した。しかし、

再び報復が美德の声をかき消した。再び激情が理性の光を呑み込み、非情の魂がそのたくらみに固執した。

彼がまだ思いを巡らせている間に、ウーゴが入ってきた。ザストロツィは良心の痛みを押し殺して、ヒースの野まで後について来るように言った。ウーゴはそれに従った。